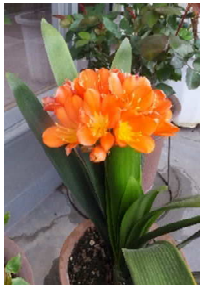
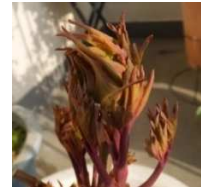




2 月初旬にはまだ固い蕾だった君子蘭と牡丹が、今、桜が咲き始める前に満開となって、エルミタージュの窓辺をにぎわせてくれています。



肥料や水やり、草取りなどをしてきましたが、この小さい作業そのものも、楽しみに待つ喜びの一環でした。日々、私は、待ちながら、毎日の生活を続けているように気がします。何を待っているのか？ 良い知らせをです。「夫の病気が治まり、普段通りの生活が過ごせます」という主治医の診断を私は待ちわびています。



振り返れば、これまで私は、幸せな人間関係、安定した生活、自由な日々、健康、エトセトラ、エトセトラ…すべて、ささやかな人生の、せめてもの、小さい願いだと思い、自分たちのことばかりを願い、待ってきました。自己中心的な私でした。苦しい時はあっても、それなりに満たされ、感謝しています。全ての人々は私と同じように願い、暮らしているのではないかと思います。そして、愛する友人たちが、私たちと同じように、苦しみ、忍耐して今を過ごしておられるのを知っています。

夫の回復を切に祈って待ってきました。杖をついて、一日 3000 歩を目標に、外を歩いています。足を運ぶのにも、力を入れて、脚を振り出しているようです。途中で休憩、時にヨロヨロしながら。帰宅して、階段を昇る時は、一步、一步足をそろえて上りますが、力を振り絞って3階にたどり着くようで、ハアハアしています。そして、パンパンにむくんだ脚をマッサージしてあげると、ああ、楽になったと喜んでくれるので、私もやりがいがあるというものです。嬉しいです。筋力回復には時間がかかります。ここまで元気になったことをどれほど感謝していることでしょうか。

けれども、この病気になって、友人、知人から、すでに手遅れだった、とか、治療法がないとか、回復が望めないこともあり得るという情報もありました。誰でも、健康は日々衰えていき、愛する人にも先立たれ、自由に身動きが取れなくなっていく、そして、必ず「死」が訪れます。今、与えられている、日常の小さなささやかな喜びも味わえなくなる時が来るでしょう。しばしの小康状態を保ち得ても、やがては、最終的には「死」が待っていることに気付きます。苦しい時間が続くかもしれません。苦痛は避けたい、いっそ、楽になりたいという思いは誰にでもあるかもしれません。でも、自分の意思表示ができない幼子であれば、苦しくても、命を燃やし続けて、生き切るでしょう。命は神様が与えてくださったものです。最後まで、大切にすることは、神様との関係をも大切にすることでしょう。

「死」までの時、何を待つのか。どのように待つのかをいつも考えさせられ続けています。クリスチャンとしては、「死」の彼岸を、永遠の天国として待つだけではなく、「死」を待つこの時も、永遠と結びあう時として、豊かに祝福をもって導かれる時だと受け止め、日常の小さな喜びを味あわせていただくに違いないと信じています。究極的な、永遠の喜びに満たされて、待ちたいと思います。

旧約聖書の預言者ミカは、「平和」を求める預言者でした。自然は荒れ果て、政治家は私欲を求めて腐敗し、社会の隣人関係は信頼ができず、家族も敵対しあい、どこにも平和はなく、「善」を見つめることができなくなると感じながらも、

しかし、わたしは主を仰ぎ／わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聞かれる。(ミカ7:7)

と、神が願いを聞いてくださると信じ、「希望」をもって、忍耐して「待つ」と信仰を告白しています。